

グラフにみる

工場誘致

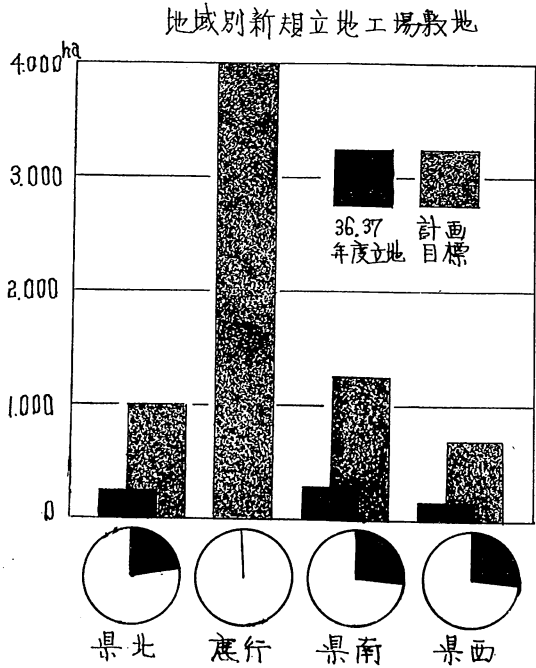
本県総合開発計画によれば、36年度から10か年間に約5,000ヘクタールの工業用地を新規開発することになっている。そしてここに企業を誘致し本県経済を飛躍的に発展させようとしているわけであるが、このたび総合開発事務局から、新規立地工場概要として、昭和35年1月1日から38年3月31日までに、誘致された工場数及び敷地面積等が発表されたのでこれをグラフ化してみた。

35年から38年3月までに328工場が新たに立地し、その敷地は約1,032ヘクタールで、これには500坪未満の工場が含まれていないから、実際にはこれを上まわる数値になるわけだ。

総合開発計画によれば、日立を既成工業地区として、勝田、水戸、石岡、土浦、下館、古河、岩井、鹿島を開発中核地区としているが、このうち勝田、石岡、土浦、古河、岩井などの地域では、顕著な実績を示しているようであるが、水戸、下館についてはこれからの誘致に期待されるところが大きい。鹿行地区については、まだ産

業基盤の最も重要な交通関係の条件が整備されていないために、誘致の実績を云々する時期でないようである。

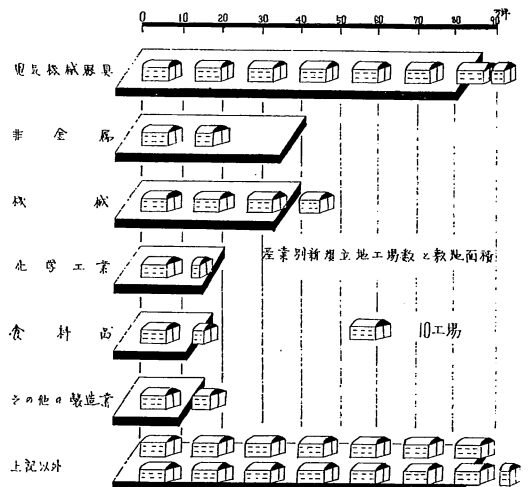
計画第1年度の36年と第2年度である37年度の実績をあわせ、目標に対する実績率をみると、総数で14.4%、県西26.0%、県南25.2%、県北22.2%の順で臨海工業地帯として造成される鹿行地区を除いては極めて順調に進んでいる。しかし、その内容のみをみると、進出企業の7割までが本社を他県に有していること、資本金1,000万円未満、敷地面積5,000坪未満という小規模企業が半分以上であることが注目される。



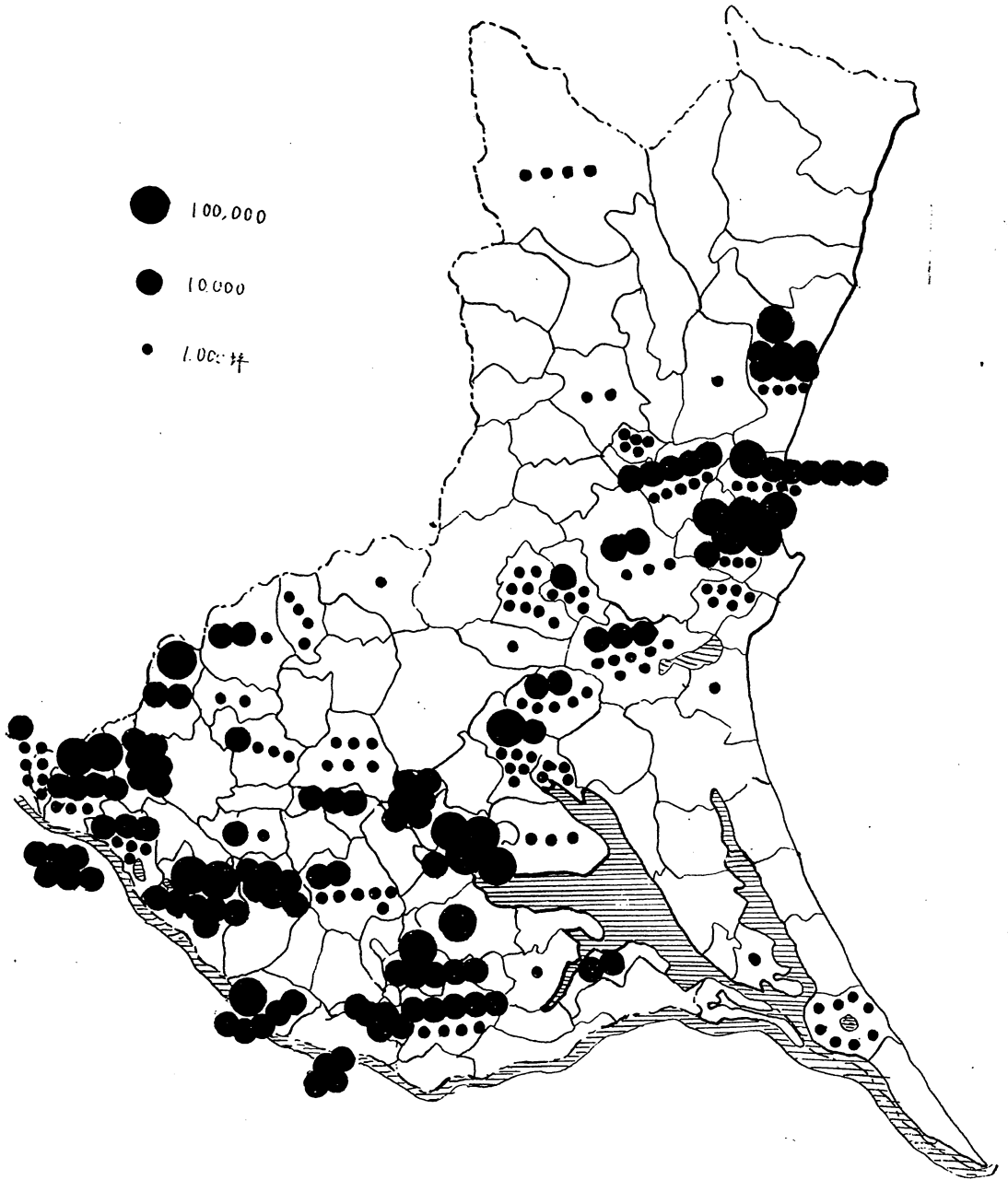
新規立地工場の内容

敷地面積別	5000坪未満 (225)	5000~10000 (35)	10000~30000 (14)	30000以上 (24)
資本金別	1000万円未満 (219)	1000~5000 (42)	5000~1億 (19)	1億以上 (24)
本社所在地別	京 法 (199)	東 西 (12)	他 県 (12)	県 内 (100)

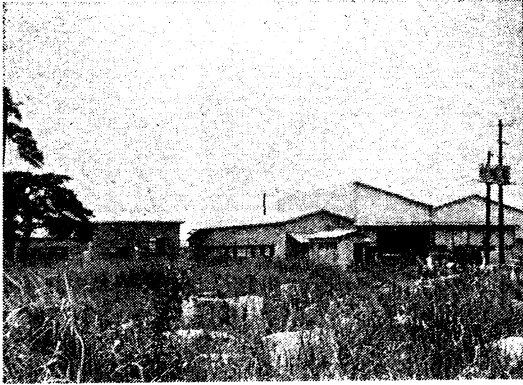
() は工場数



地域別新規立地工場の敷地面積



郷土産業めぐり(3)



〔真壁の石材団地〕

石 材

はじめに

県西地方の筑波山を中心とする山々は、平野部にあるめかあまり高くないが、雨あがりの、なだらかな緑の山波は見る者の心に一種の安らぎを与え美しいものである。春から秋にかけてはハイカーでにぎわい、本県観光の一翼をになつており、最近、このふもとに人口17万人という新官庁都市が建設されることに決つたが、これはとりもなおさずこの地方が自然的な条件に恵まれていることを物語つているのである。この地方の山肌をみると白い点が散在しているが、これらはいずれも採石場で、多くの石材が採取されている。近頃の建築ブームによつて山は益々活気を呈している。ここでは本県の石材の主産地である、真壁と稲田にスポットをあててみた。

真 壁

概 況

常陸三山（筑波、加波、足尾）を無尽の宝庫とする、「真壁の石」は硬質緻密の優秀な花崗岩で土木建築の資

材としてあるいは碑石、記念碑等研磨彫刻用としてその用途も広範囲で、特に建築においては近代都市美造成の大きな要素となつている。

筑波山魂の加波、足尾を中心とする南北18キロ、東西4キロに72平方キロにわたる山地一帯は主として古生層とこれを貫く黒雲母花崗岩からなつており、石材としては主に黒雲母花崗岩を採石している。黒雲母花崗岩は粗粒花崗岩、中粒花崗岩、細粒花崗岩、優白質中粒花崗岩等、品質は極めて硬質で美しい光沢を有したものが産出されている。

採掘の歴史は遠く豊臣時代にさかのぼり、関東地方では最も古くから小規模ながら城廓用にあるいは地方の建造物に使用され、墓石については加波山神社等の岩石を対象にしたこの地方の信仰にちなんで古くから使用されていたことも知られている。明治23年関東石材会社がフランス人の手によつて採石に着手して以来逐次拡張され今日みるようになった。

生 産 額

年間産出額は金額にして13億円、3,300立方メートル(約15万切)で、赤坂離宮(現国会図書館)の用材としても約4,600立方メートルが用いられたのをはじめ、建築、土木、美術工芸、機械工業等の用材として広く用いられている。

販売品目は建築用挽材、加工材、土木用間知石、割栗石、碑石、記念碑、灯籠、庭園用天然石、機械工業用定盤等で販売先は京浜方面へ産出量の6割が、更に遠く四国九州地方へも送り出されている。真壁地方の石材業者は126で1,500人の従業員が働らいている。

今後の見通し

石材関係で特に重要な問題は輸送面であるが、加工場

は殆んど駅附近に採石場は真壁、樺穂、雨引の各駅から4キロ以内にあり主に鉄道輸送であるが、近時自動車輸送の発達に伴い東京附近は勿論、広範囲にわたって工事現場へ直送し、組合員所有の自家用車は大型20台、小型35台に及んでいる。

今後の需要見通しを業界の方にうかがってみると、来年のオリンピックを目前に、建築用材として今後も相当の需要があるものとみられ、また石灯笼等土産品として外人客にも珍重されることを強く期待しており、設備の近代化を図り能率的にしかも優秀な石材を生産しようと意気こんでいる。

36年6月から継続事業で真壁駅から東へ4キロの大字塙世に6.3haの石材工場団地が建設されており、すでに10の事業所が操業している。この団地は、石材業のかかえている騒音、粉塵、石材の積み降しなどの問題を解決するために計画されたものである。

稲 田

概 況

稲田のみかけ石は、笠間市稲田を中心に東西8キロ、南北6キロにわたる山地一帯より産出され、中粒の「黒雲母花崗岩」で、明治29年発見採掘されて以来本県は勿論全国にもその名が知られている。

石質は硬く、白色で光沢があり、白と黒（石英、長石黒雲母）の配合が均整で、斑点、筋帯などの欠点がなくかつ研磨すると鏡のように平滑となり、自然のもつ模様の優美さは、近代高級建築用材として広く用いられている。

生 産 額

年間生産量は約20万屯を超え、金額にして約8億円に

及んでいる。事業所数は約60で、これらは採掘、あるいは加工のみを行なう事業所と、この両者を行なっている事業所からなっている。従業者数は約1,200名で、このうち10人未満の小規模事業所で働いている人達は6割を占め、市内居住者がほとんどであるが、一部は近隣より通勤している。

採石場は稲田駅から4キロ以内に60あまりあり、山元の優良な原石は巨大で豊富である。長物、大物、角材の生産は容易で、大量の需要にも応じられるようになっている。販売先は真壁と同じく東京都が大半を占め、関東各県をはじめ全国に販売され、土木建築用材としては県内、千葉県で特に需要が多い。

今 後 の 見 透 し

稲田の場合も今後の需要見透しは非常に明るく、現在加工場は山元と駅附近に大小合せて約50あるが、これら工場の機械は次々と近代化され、優秀な仕上と規格の正確、納期の迅速化を図り、輸送面ではトラックによって200キロ以内は直送の便利を図るなどサービスの向上に努め、他面設備の近代化とともに労働条件を改善し、山で働らく人達も工場の人達もよい環境のなかで作業が出来るようにすると業界はのべている。



〔機械化された稲田の採掘場〕

ある調査を終えて

ある日、市役所から統計係のMさんが訪れ、今度7月1日に事業所統計調査が行なわれるので、その調査員になつてもらいたいとのこと。百姓である自分には農業関係の統計はやつたことはあるが、それ以外の統計調査はやつたことがなく、そんな仕事に対する自信も全然ないし、自分の仕事も忙しくてとても出来そうにもないのでお断りした。ところが一週間ほどして統計係長が来て、
「今までいろいろな統計をやってくれたHさんが病気であとをやってくれる適当な人がないので是非引受けてくれ」という。

私の家族は妻と乳呑児で、耕地1町5反歩を耕作している農家であり、それでさえ手不足で、そのうえトマトや野菜の収穫期に入りとてもそんな余計なことはやつていられない状態なので、事情を話し誰か適当な人を見付けてもらいたいとお願いしたが、「随分ほかの人も物色したが、どうも適当な人が居ない、ご存知のようにこの調査は、国や地方自治体などの行政、経済施策の資料として、きわめて大切な調査であり、調査の正否は調査員の手腕によつて決定されるので、誰でもというわけにはいかない、それに昨年行なつた夏期農業基本調査の結果が大変良く出来ていたので、そんな方をお願い出来たらと思つて」などいろいろと述べられ、「誠に迷惑とは思いますが」と頭を下げられてしまった。あんまりしつこいので最後には厭味を言つてはみたが、彼の熱意と根気に負けつい引き受けざるハメにいたつてしまった。

さて、数日して事務の打合会が支所で開かれ、係員からいろいろと説明された。説明の結果、判つたような、とつてもむづかしい調査にも感じられた。事業所調査と言うと、その事業所という言葉からして大きな工場などが想像されるところであるが、家内工業のようなものや大工さんまでが調査の範囲に入ると言う。

私の調査区は、合併による新市のうち農村地帯であつたが、最近工場なども建ちはじめ、それに伴つて商店の数も多くなり、新しい街として発展しつつある処で、該当する調査客体も随分と多くなりそうなので、今更引き受けたことを後悔したが、男同志の約束として返上することも出来まいと覚悟を決めた次第である。

調査期間は7月1日から5日まで、丁度トマトの出荷が始まる頃で、公私とも多忙な時期となつてしまつたが妻にグチられながら、調査票を抱いて巡回することにする

先ずさきに胸算用で調べた調査客体では50位かと思つたが、実際に行なつてみると家内工業的なものがあつて少し増えそうである。人を使つている大きな工場や、商

店などでは割合と楽に調査が出来たが、中にはまたかと思ふ顔を見せられたり、税金を取られるのではないかなどと申告をしぶられたりしたこともあつた。それでも会社以外の客体が多かつたので、金銭的な調査が免除されたことは大へん助かつた。

特に調査しにくかつたのは、個人でやつている大工、とび職とかいつた職人さんや家内で内職の下請や、編物と服仕立を業的に営んでいる奥さん達で、はつきりと家では事業所などでないからこんな調査票を出すのは見当違いであるとか、こんなものを書くとすぐ税金を取られるから、などと喧嘩腰でマクシ立てられるのには閉口、なだめつ、すかしつ、米つきバツタのように頭を下げるこの辛しさは、国や県のお役人は知つているだろうか。

しかし、曲りなりにもどうにか調査票がまとまり、夜なべまでして内容を検討整理し、市役所まで提出し係員からお世辞でも「良く出来ました」と礼を言われた時の気持は、一つの仕事を果たした安らぎ、責任から解放される安堵感とをしみじみと味わう。

妻に厭味を言われ、トマトも赤く熟れさせながら、つい生来のお人好が引き受けてしまうことを反省してみる
調査が終つてから、いろいろ考えさせられることが多い。このような調査を行なうについて国に望みたいことは、第一線の調査員の待遇である。現在の物価高では1日350円也の手当は余りにも安くはないだろうか、自分の仕事をある程度犠牲にして、頭を下げて下げ厭味を言われ、ありもしない頭をしぼり夜なべまでして、これを作成する苦勞は判つておられないと思う。金銭的な面でのみ仕事をするわけではないが、今時百姓手間で350円では子供も頼めまい、実際にこの統計が必要ならば、この点を良く考えてもらいたいと思う。

つぎに統計調査に対する趣旨の普及が足りない、かへ声ばかりでは駄目だ、もつと統計が必要なら一般の人が良く理解するような根本的な何かの方法が考えられないか。もう一つ調査票は頭の良い人が作るためか、私達無学の者にはむづかし過ぎるようだ、まして一般の人には尚更わかりにくくはないだろうか。

統計は行政施策やその他企業経営にも必要欠くべからざるものであると偉い人や、識者は言う、確かにその通りだと思ふ。それ故にもつとみんなが納得して正確に統計がスムーズに得られるような態勢を考えてもらいたいものである。

私の考えは、独り良がりかも知れないが、真に統計を愛するため苦言を呈する次第である。(T生)



人間雑話 (15)

茨城大学教授 塚本勝義

日本の知識人は「通俗」という言葉をきらう。そして理くつを好む。何だか判らぬ理くつを感心する。だから、とにもかくにも難しい理くつを暗記している点においては世界一流だろう。それで毎日の生活は甚だでたらめである場合が多い。物知りな身についた教養が不足している。外国語はよく知っている。この外国語を村のお婆さんに話すときに得意になって使うのだから驚きいる。

酒を食わねばならないということは、あまりにも通俗なことだ。通俗だからといって、一年も絶食したらどうなるか。酒好きが酒を飲しがるなんて、ばかたほどの通俗的理くつだ。だからといって酒好きに酒を飲まなかつたら、あぶなかつて近寄れまい。夏の薄着を厚着なんて、通俗の第一だ。通俗だが、これをやらなかつたら身が持たぬ。

われわれの毎日の生活を顧みると、99パーセントは通俗な生き方をしている。年頃になつて結婚するのも通俗。一二年経てば赤ん坊がとび出すのも通俗、さらに夫婦喧嘩の回数が急上昇するのも通俗。ところで、ほんとは結婚すれば、そこらいついばいうれしくなり、二重顔を出せば、おめでたおめでたであり、夫婦喧嘩もつれをバイクに乗せて、ふつとばせば、命とりにもなつておけぬ。人間の悲喜いずれも「通俗」に完全に引き運ばれているんだ。「通俗」に徹した人間が幸福者になり、通俗を軽べつする人間が不幸になり、きらわれ者になり、余計者になるといつていい。

こんなに大切な「通俗」を、「通俗的なやり方」を、「通俗的な考え方」を、なんでさげすむのであろうか。さかだつて、年頃になれば結婚するのがあたり前、通俗的な考え方に従つて行動すれば、必ず幸福になる。もちろん外れもたまにはあるが、専門家の作られたものに当り外れはあるんだから、それは仕方ない。物にも事にも例外がある。ところが、生半可に小理くつを暗記すると、こつちの造作やツヤも考えないで、手ばかり注文をつけるから、結局は好機を見送る、三振となり、自信力は年と共につが、男性には全然魅力のない存在となつてしまう。

今の人間、今の社会では、われわれは、「通俗」を大嫌になつたら、幸福もつかめぬし、安全に生きる

ことさえ難しい。こんなに大切な「通俗」をさげすむ知識人は、どうやら本物の知識人ではなさそうだ。

○ ○ ○ ○

池田さんが「人造り」を言い出したら、日本中いたる所で「人造り」論がにぎやかになつた。結構なことだ。しかしながら、人造りの根本は、先ず論ずる人自身が自己改造を断行するのが第一歩だ。出来はずれの自己をほつたらかしてにおいて、人のことにはばかり改造のメスをふるうなんて、虫が良すぎるし、第一、そんな、いいあんばいの考え方で、改造のメスがふるえるはずがない。いい人には動かされるが、ろくでなしには反拗したくなるのが人情だ。人情を無視して人間改造をやるうなんてこれは難しい理くつにだつて合わない。

わたくしの言つてるのは通俗論だ。普通の体温で生きてる人間なら、わかり切つてる平凡論だ。うぬぼれたことをいうようだが、通俗で平凡で、その上に陳腐きまわる理くつだが、実行すれば効果テキメンであろう。だから通俗であり平凡であり陳腐でもあるんだ。

いつたい日本という国土には、理くつが多過ぎる。役にたつ理くつなら、あふれるほどあつてもいいが、単なる理くつとしての存在以外には、何等の存在価値のない理くつが多過ぎる。やかましいだけで、実際生活の方はちつとも豊かにもならない、深くもならない、すつきりもしない。

ひんぱんに開かれる会議なんかも、くだらぬ理くつをカットしたら、もつともつと短い時間で重大な決定ができるだろうに。事の急所にふれない、昔の言葉を用いて表現するなら枝葉末節にひつかかつた愚論迷論があまりにも多い。愚論迷論をまくし立てなければ、会議をやつたような感じの出ない人間さえあるんだから、困つたを通り越してあさましく感じられる。本人は趣味でやつてることだろうが、人さまに迷惑をかける趣味では罪に価するといえよう。

○ ○ ○ ○

若いうちは、ややもすれば「難しさ」を愛し、「奇」を好む。そして妙な方向にそれて行く。自分では伸びたつもりだが、実はあらぬ方にそれて行くのだ。杉の木のはいいのは真直に大空に向かつて平凡に伸びる。横にねじれて伸びれば忽ち抜き切りされてしまう。